

令和7年度 北海道小学校長会地区活性化支援事業【実践事例レポート】

- 1 報告地区：宗谷地区
- 2 事例報告学校名：稚内市立稚内南小学校
- 3 報告者職・氏名：校長 三野宮 誠 一
- 4 キーワード：地域社会とともに運営する学校づくり

1 はじめに（目指したこと）

稚内市では令和5年度より六つの中学校区ごとに学校運営協議会の取組をスタートさせた。本校が属する南地区では令和5年度に体制を整え、令和6年度より「地域社会が参画する学校運営を通して、学校教育活動をより充実させ、かつ持続可能なものとする」ことを目標に活動を開始した。活動の柱の一つは「南地区の子どもに関する課題の改善・解決に向けて知恵を絞ること」、二つ目はこれまでも行ってきたことではあるが「学校運営（教育課程）に地域社会が日常的に参画する機会を拡充すること」とした。

2 南地区の校長としての働き

(1) 組織づくり

南地区では小学校2校と中学校1校で一つの会をつくることとなった。委員には教育関係団体の長の皆様及び地域の核となる皆様に就いていただいた。地区内には9月にカーリングのオリンピック代表決定戦を開催したみどりスポーツパークなどの生涯学習施設が複数あるため、各施設代表の皆様にも委員になっていただいた。

(2) 地域コーディネーターの選定

本校に勤務している教員業務支援員が社会教育主事として勤務した経験があったため、本務の前後に地域コーディネーターとしての事務を進めてもらうこととした。報酬については令和5年度より稚内市教育委員会に必要性を訴え続けているが、令和7年度現在、予算化されていない状態が続いている。

(3) 学校運営協議会における熟議の場づくり

年度ごとにテーマを設け、会議の中で改善・解決のための知恵を絞り、立案した施策を地域学校協働本部が中心となり実行する流れとした。昨年度は「学力の確実な定着」「読書活動の推進」を、今年度は「不登校児童生徒の日中の居場所づくり」「学力の確実な定着」をテーマとした。

3 委員からの意見をベースにした活動の具体

(1) 教育課程と地域社会とのつながりづくり

地域コーディネーターは教育課程に参画が可能な新たな地域住民や団体を、学年部会からの要請に応じて探した。昨年度は年間を通して16の学習をコーディネートした。

(2) 地域住民による学習支援ボランティア事業

児童の学力の確実な定着を図るために、二つの小学校の低学年算数科授業の中での学習支援ボランティアを地区内で募集した。昨年度は地域住民4人が2学期末までの間の来校可能な日に児童の学習支援にあたった。授業者（担任）からは、「ボランティアの皆様は主体的に児童の支援にあたってくださるのでたいへん助かっている」との声が聞かれた。3学期には自宅学



6年総合的な学習の時間
「未来をつくる私たち」

習期間中の稚内大谷高校3年生3人に児童の学習支援にあたっていただいた。

(3) 夏休み中の図書室開放事業

児童が本に親しむ機会・時間をつくるために、ボランティアを地区内で募り、「夏休み中に各校の図書室を開放する取組」を二つの小学校で5日間行った。延べ20人の児童・幼児が読書や学習の場として活用した。市立図書館にはこの取組に向けて仕掛け本を含めた蔵書の特別貸し出しをお願いした。

(4) アウトメディアをねらいとした体育館開放事業

児童の「メディアに触れる時間の縮減」及び「体を動かし、ぐっすり寝ること」をねらいとして、外遊びが難しい時期の日曜日午後に地区内の一つの学校体育館を開放する試験的な事業を行った。事故等の防止のため、「保護者が一緒についている児童のみ体育館で遊ぶことができる」とこととした。約40人の子ども・保護者が来校し、親子や子ども同士で体を動かし過ごした。

4 特徴的な取組（活動）

(1) 社会教育団体（南地区子育て連絡協議会）との連携

本地区でも子どもたちの声を聞き、子どもたちのやりたいことを実現させる機会をつくりたいと考えているが、学校運営協議会の活動への予算付けがない状況である。そのため、各町内会の「子どもに関すること」の連合体である南地区子育て連絡協議会がその役割を担うこととした。昨年度は南小学校児童会が中心となり、実行委員会形式で幼児や低学年児童に夏の一時を楽しんでもらうための「南ちびっこまつり」を自分たちの力で企画・運営した。（ポスターも児童が作成）8月8日に地区内の子どもと保護者合わせて200人が参加し、実行委員が運営する緑日や花火を楽しんだ。構成団体である町内会の育成部や各校PTAが来場者の誘導や安全管理にあたった。



(2) 「子ども食堂」の中での学習の場づくり

南地区活動拠点センターで月1回開催される「子ども食堂」にきた子どもたちを対象とした学習の場を設ける取組を、地域コーディネーターが学生ボランティアの力を借りながらつづけている。ボランティアには市内の高校生や大学生が参画しており、「教えること」に関心をもってもらうよい機会にもなっている。



(3) 不登校児童生徒の日中の居場所づくり

自宅にいる不登校児童生徒が興味関心をもっていることに関わって、日中に地域の中で活動の場をつくることのできないかを今年度は新たに探っている。市内の育英館大学に興味をもつ児童生徒がいるため、大学生のエスコートの下、定期的に大学内で体験的な活動の場をつくっていたことを現在企画している。

5 おわりに

南地区の各学校は徐々にではあるが「地域社会とともに運営される学校」に近づいていると言える。校長として今後求められる役割はマンネリ化の阻止だと考える。他地域の実践を紹介しながら、委員の皆様が自分事としてアイデアを出すことができる熟議の場がつけられるよう、伴走していただければと考えている。